

『二十世紀中国文学図誌』 14 (選訳)¹

森川 麦生 登美江・星野幸代 訳

四十、伝奇的な詩僧蘇曼殊² (楊義著 森川 麦生 登美江訳)

蘇曼殊 (1884 - 1918) の文章のスタイルは、その人格と対照をなして魅力がある。平素交友する大半が革命党員であったことは、奇とするに足りない。しかし僧侶でありながら、鉄血の心意気を抱いていたのは稀なことである。筆にした多くの詩文が苦しみ執着する愛情の表現であったことは、奇とするに足りない。しかし僧侶でありながら、杜牧・李商隠等の晩唐の詩風に親しんだのは珍しい。飲み食いに耽溺したことも、奇とするに足りない。しかし僧侶でありながら、パリの名妓椿姫の好んだボンポンを口から離さず、そのため胃腸病で夭折したのは稀なことである。しかも蘇曼殊の社会的活動や、恋情への耽溺、飲食への嗜好、そして茫漠と霞んだように見える行動の姿は、むしろ渾然として溶けあって世俗に陥ることなく、風流洒脱の中に伝奇的神秘的な感じを与える。この人柄と文章の非凡さによって幾度かの「蘇曼殊ブーム」が起きた。実にこれは、我が国の民国初期における文壇の奇跡であろう。

柳亜子父子の編集する『曼殊全集』(全5冊、上海北新書局、1928・2 - 1929・4)³の巻頭に掲げられた肖像について言えば、中国の俊英な僧にしてアルファベットで署名し、身に袈裟をつけ、手に数珠と、風雅・教養を示す扇子を持つ。恐らくこれは作家が稀に現す本当の姿であろう。しかも蘇曼殊は35歳の漂泊の生涯において、日本語・英語・梵語に通曉し、詩・文・小説・翻訳・絵画に長じ、すべてにわたって相当に深い造詣を有する。柳亜子の「蘇玄瑛新伝」〔玄瑛は、蘇曼殊の本名〕は次のように称賛する。

「絵画に関しては精妙で独特な画風があり、自ら新流派を興して、人の門派に頼らなかった。端切れも紙切れも利用した。こうしたことは世俗の人の及び得ることはない。小詩はもの悲しく、また艶やかさもあって比類ない。小説や通常の文章も、俗塵の風がない。」(「蘇玄瑛新伝」)



曼殊上人像

革命的「詩僧」そして南社の成員として、蘇曼殊ももちろん雄壮で軒高とした詩篇を書いた。例えば1903年の「以詩並画留別湯国頓〔詩並びに画を以て湯国頓に留別す〕」⁵二首は次のように詠う。

海を踏む魯連は秦を帝とせず、
茫茫たる煙水に浮き身を著す。
国民に孤憤す英雄の涙、
灑上す鮫絹故人に贈らん。⁶

海と天に龍は戦いて玄黄を血め、
披髮長歌して大荒を覽る。
易水蕭々として人は去れり、
一天の明月白きこと霜の如し。⁷

これらの詩は高潔で誇り高い魯仲連〔戦国、斉の人〕と、千古の英雄的刺客荆軻〔けいかに〕を人格の理想とする。そこに、茫茫たる煙水、涙が鮫絹〔鮫人 人魚 の織るうすぎぬ〕に灑がれ、龍は玄黄〔天地の意味〕に戦い、月の白きこと霜の如しのような、広大で美しいイメージが融合する。その格調は杜牧・龔自珍の豪壮と寂寥の中に、幾分かパイロン式の世の中に容れられない孤独な憤りが浸透している。

本質から言うと蘇曼殊は、近代的ロマン気質を持つ、感受性の鋭い多才な抒情詩人である。蘇曼殊の愛情詩は非常に興趣に富んでいる。1913年李商隱にならって、「無題」詩八首を作り、また、「集義山句懷金鳳」⁸もある。蘇曼殊は日本の歌妓百助（琴の奏者）との恋情が極めて深かったと思われ、詩を十八首書いている。例えば1909年には「為調箏人續像〔箏を調べる人の為に像を絵く〕」⁹二首がある。

禅心に收拾して鏡台に待す、
沾泥の残絮に沈哀有り。
湘弦に灑いで遍し臙脂の涙、
香火重ねて生ず劫後の灰。¹⁰

淡く蛾眉を掃きて画師に朝い、
同心の華髻に青糸を結ぶ。
一杯の顔色双涙に和し、
写し就る梨花誰に付与せん。¹¹



箏を調べる人小影

禅心〔悟った静かな心〕と鏡台、臙脂の涙と劫火^{ごうか}の灰のイメージが錯綜する。さらに、「写し就る梨花誰に付与せん」という問いかけは、細やかな感情の中にひそかな苦痛を交え、哀切でたおやかに書かれている。ここに採り入れた「東方之花 百助女史、蘇曼殊 小人題端、秋星閣蔵」の絵巻は、まさに蘇曼殊が琴の奏者のために描いた肖像である。絵の上部には蘇曼殊作の「本事詩」が題され、少し改変してある。「無量の春愁無量の恨み、一時みな指間に向かって鳴る。我已に袈裟は全て湿り透り、なんぞ重ねて割鶏の箏を聴くに堪えん。」¹²また倪瓚（雲林居士、元代、無錫の人）の「柳梢青」一段を録して、「以て百助眉史〔妓女の異称〕の一粟を博さん」¹³とする。この間に表現されているものは青年和尚の詩と酒の風雅である。だが詩筆にも画風にも哀感が漂って清澄であり、やはり俗離れしている。

蘇曼殊の別の絵一幅は、竹林の村の渡し口に細身の上品な女性が風を受けて立つ。『紅樓夢』の林黛玉の優美さがあるように見えるが、しかしその中にも野外の興趣が失われていない。詞文は「女弟子」を自称する張傾城が書き写したものである。

誰か知る臥処を徘徊するを、
謝庭の風景はみな旧に非ず。
画堂に塵掩い、
蓬^{よもぎ}は三径に生じて、
門に疎柳垂る。
白昼初めに長く、
清風自ずから至りて、
流年空しく又^{ふたたび}す。
多情の燕子を見るに、
飛び来たり還り去りて、
真^{まこと}個に首を回らずに耐えず。¹⁴

昔日嬌は阿母に随い、
拈^{ねんしん}針を学ぶに窓に臨みて繡に挑む。
斜陽の楼外、
熨は銅斗に残りて、
線紋^{すう}を舒ばせり。
蠶^{かい}は三眠せんと欲し、
鶯還りて百轉す、
落花の時候。



曼殊作、竹林美人画

問うに重ねて来たれば応に銷魂すべきや否や、
試みに江城の茄奏を聴かん。¹⁵

画家は「画跋」において言う。ここに書き写したものは明末の女性素嘉の「水龍吟」詞である。「緑惨紅愁〔若い女性の悲愁〕に、一字一淚する。ああ、西風〔秋風〕の故国に、衲〔僧侶の自称〕は幾度が管を握りて下ろす能わず。」¹⁶ 故に、ここに現れ出てくるものは、依然として「衲は本愁いを工とす」¹⁷という抒情の主体である。

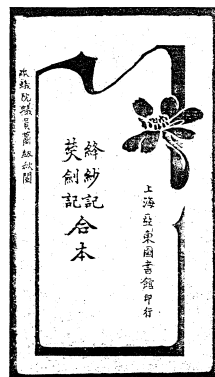
民国初期、蘇曼殊が一世を風靡したのものには、そのほか小説がある。とりわけは中篇「断鴻零雁記」(『太平洋報』、1912・5・12 - 8・7¹⁸)と短篇「碎簪記」(『新青年』第2巻第3号、4号、1916・11、12)、「焚剣記」(『甲寅雑誌』第1巻第8号、1915・8)、「絳紗記」(『甲寅雑誌』第1巻第7号、1915・7)がそうである。これらの作品は過渡時代における、引き裂かれて、人には言えぬ形容し難い苦しみを抱いた精神を、多く描いている。主人公の或る者は、目上の人に強いられて古風で裕福な女性と婚約する。しかし別の開明的な新女性に心をひかれ、結婚と愛情の苦しみを嘗めつくす。そしてついにはそれぞれが情のため殉じてしまう。別の主人公は一人、或いは二人の女性と苦しい恋に落ちる。しかし自分がすでに剃髪して僧侶になっていたり、もしくは友人の仇を討つために、結局別れて遠くへ去り、巡り会えるときにはすでに時機を失して、生命の終点にある。行文からしばしば、東西文化の激動が矛盾に充ちた選択を人に突きつけたこと、そしてその社会における騒乱の様子とが、窺われる。曲折する悲歡離合の筋は、登場人物の幾重にも傷ついた心を苛みながらも、感傷主義の抒情性がある。『絳紗記』の末尾では、女性主人公秋雲が蘇州城外の小さな寺に行き、男性主人公夢珠と巡り会う。このときにはワイルドの「サロメ」のような薄暗くて怪異な場面が出現する。

「このとき庭は空虚で夜は静かであった。しかし灯明があつて、光が周囲の壁に揺らいでいる。私がさらに母屋に続いた小部屋に入ると、そこもまたひっそりとして誰もいない。それで夢珠はまだ帰っていないと思い、そこを出た。廊下の突き当たりまで来ると、階段のそばにちらっと仏像があるのが見えた。顔は白かった。近づいてみると、夢珠が瞑目してぼつねんと座し、雑草が膝のところから生えている。私が呼びかけても、答えなかった。手を引いてみると、鉄のように動かない。私は始めて、夢珠が坐して亡くなったことが分かった。



初版『断鴻零雁記』

急いで出て、秋雲に知らせた。秋雲はその前に来ると、一言も言わずに黙って見ていた。ふと見ると夢珠の襟から深紅のうすぎぬが覗いている。秋雲はそれを引き出して、よくよく見ながら夢珠の周りを歩いた。やがて夢珠の懐に突っ伏して抱きしめ、涙を流しながらその顔に口づけする。私は静かに立っていた。風の音が突然かすかに聞こえ、夢珠の肉体は忽然と灰に化した。ただ秋雲の手の中にうすぎぬが残っている。」(『甲寅雑誌』第1巻第7号、1915・7¹⁹)



蘇曼殊小説集 表紙

こうした過渡期の豊かな文才による探求性、そして濃厚なロマンの息吹をもつ抒情性は、五四期のロマン的気風に対する遥か霞んだ彼方からの遠波と見ることができる。1917年春銭玄同は、新文学にまだ創作の実績が見られないとき、『新青年』同人に次のような問を發したのも怪しむに足りない。「曼殊上人は思想が高潔で、その作る小説は人生の真実の在りどころを描写した。十分に新文学の基礎となることができるのではないだろうか。」(『新青年』第3巻第1号、1917・3、「通信欄」)

(森川 麦生 登美江：大分大学経済学部教授)

四十一、『文学』月刊の優れた編集(楊義著 星野幸代訳)

1932年、一・二八 上海事変において上海の東方図書館が破壊され、『小説月報』第23巻第1期も商務印書館の総工場において日本軍の爆撃による焼失の憂き目にあった。二十一年間続いた大型文学雑誌『小説月報』にも命運の尽きるときがきた。その頃鄭振鐸は燕京大学・清華大学教授を兼任しつつ、『中国文学史』執筆に専念していた。翌1933年春、鄭振鐸は一時南下してくると、『小説月報』の事業を継ぐにふさわしい大型文学月刊の創刊について茅盾と相談し、ただちに十人編成の編集委員会を組織した。魯迅(正式には連名せず²⁰)、葉聖陶、郁達夫、陳望道、胡愈之、洪深、傅東華、徐調孚、鄭振鐸、茅盾である。こうして1933年7月『文学』月刊(1933・7 - 1937・11)が上海生活書店より創刊され、鄭振鐸、傅東華が主編となり、黃源が編集補助を勤め、茅盾は実際の編集業務に関わった。この雑誌は数多くの特設欄によって内容の豊かさを示し、絶えず特集号を打ち出しては氣勢をあげた。創作と評論のレベルの高さは群を抜いており、堂々と上海文学雑誌界の主要な座を占めた。創刊号から第5巻まで 文学画報 欄が設けら



れている。第6巻(1936)以降においては 木刻 欄に改められ、そのほかに 図画 写真 の欄もある。第7巻第4号(1936・10)²¹以後また 画刊 と称するようになる。この欄は世界の名画、国内外の作家の画像と写真、および木刻、舞台写真にいたる様々な画像を掲載したという点で、非常に特色があり、中国文学図誌史の重要な一頁をなしている。

「発刊詞」は、傅東華の書く「一張菜单」〔「一枚のメニュー」『文学』第1巻第1号、1933・7〕がその役割を担当し、雑誌の趣旨を大体のところ体現している。

「我々の雑誌の内容は確かに 雑 である。……読者は本誌の編集責任者と特約寄稿者名簿を見ただけで、その一端がうかがえるだろう。しかしその 雑 は、我々の雑誌が 第三種人 の雑誌だと暗示しているのでは決してない。我々はただ、誰もが皆時代の子であると信じているだけである。誰の作品であろうと、誠実に語られているものであるのなら、生活の実感の記録でありさえすれば、この時代の一部を映しており、従って残すに値する痕跡なのではなからうか。

……もちろん共通の憧憬がある 光明の道に至ることだ。およそこの光明の道を阻むものは、個人、集団、制度、主義を問わず、すべて我々の敵だと見なす。……我々はそれを呪い、討伐し、排除する。呪い、討伐し、排除する手段としては、あるときは創作を用い、あるときは批評を用い、あるときは考証を用いるが(考証も本来一種の批評である) 効果は全く同じと考えている。これが、我々の寄せ集めのような雑誌にも少しは 雑 でないところがあるという根拠である。」「(「一張菜单」)²²

この雑誌の大きな成功は、編集に携わる数人の才知が補完し協力した総合的な効果の賜物であった。その中には、鄭振鐸の文壇における人脈と抜群の組織力と古典文学への関心があり、茅盾の卓越した芸術眼と理論的素養と左翼作家とのつながりが含まれる。そこにはまた、傅東華の中間派的色彩と、実兄が江蘇省教育局長であることから現れる保護色と、彼の外国文学に関する知識とがあり、さらに黄源の編集校正と雑務における勤勉さが含まれていた。

このような総合的な効果は創刊号において素晴らしく発揮された。論文 欄には郁達夫など六名が「五四運動之歴史的意義」〔「五四運動の歴史的意義」〕を回顧する文章を書き、梁宗岱による「蒙田四百週生辰紀念」〔「モンテーニュ四百周



ポーランド、スコージラス (Władysław Skożylas) の「狩獵」(『文学』第1巻第3期)

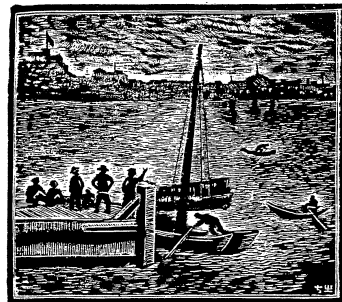
年生誕記念」という文章および翻訳作品がある。魯迅の「又論『第三種人』」(「また『第三種人』を論ず」と、ほかの欄(散文隨筆欄)に掲載された「談金聖嘆」(「金聖嘆を語る」)は非常に鋭い文章である。小説欄には茅盾「残冬」(「晩冬」)、葉聖陶「多収了三五斗」(「十五斗の豊作」)、艾蕪「咆哮的許家屯」(「咆哮する許家屯」)など反響の大きかった作品があり、さらに郁達夫、巴金、張天翼、沙汀、黒嬰、王統照などの作品がある。散文隨筆欄には、朱自清、夏丏尊、豐子愷、魯迅など名士を網羅し、詩選欄には王統照、朱湘、臧克家など老将と新鋭とがいた。雑記雑文欄には独特の趣と特色があり、顧頡剛の「明俗曲琵琶詞」(「明代の俗曲琵琶詞」)、郭源新(鄭振鐸)の「談『金瓶梅詞話』」(「『金瓶梅詞話』を語る」)、俞平伯の「駁『跋銷釈真空宝巻』」(「『跋銷釈真空宝巻』に反駁する」)、陳子展の「兩宋词人と詩人と道学家」(「兩宋の詞人と詩人と道学家」)があり、対象は古代の俗文学と雅文学(正統文学)に渡っている。そして 国外通訊 と 書報評述 欄は現実を遊離することなく、見据えていた。これが創刊した当初から、『文学』の姿勢を形作ることとなった。すなわち『文学』は、えり抜きの名士を集め、新鋭を推薦し、古今東西を網羅して、現実における進歩性に注意を払っていた。



羅清楨の木刻「狂歌当哭」、
『文学』第6巻第5期

『文学』は文化面の専制主義に抵抗しつつ、三十年代において最も長寿の大型刊行物となった。1933年末、当局が出版物の取り締まりと発禁を強化し、『文学』も停刊を迫られる恐れがあった。鄭振鐸は茅盾の急を知らせる書簡を受け取ると、翌1934年春、南下して対策を協議した。その結果が第2巻第3号の後次々と出版された「翻訳特集号」、「創作特集号」、「弱小民族特集号」、「中国文学研究特集号」である。

「翻訳特集号」(第2巻第3号、1934・3)と「弱小民族特集号」(第2巻第5号、1934・5)は、外国文学の二つの側面をあつかう。「翻訳特集号」の作品は、イギリス、フランス、ドイツ、ロシア、オランダ、スカンジナビア、ベルギー、スペイン、イタリア、日本、米国に及ぶ。注目すべきは洪深による「奥涅爾年譜」(「オニール年譜」と彼が共訳したオニールの戯曲「瓊斯皇」(「皇帝ジョーンズ」)、黎烈文訳によるフランスのジイドの「田園交響曲」(「田園交響曲」)、傅東華訳によるジェイムズ・ジョイスの「複本」²³、および陳節訳によるゴーリキーの「二十六和一個」(「二十六人の男と一人の女」)である。「弱小民族特



羅清楨の木刻「浦江晚眺」、『文学』
第3巻第3期

集号」にはアルメニア、ポーランド、リトアニア、エストニア、ハンガリー、チェコ、ユーゴスラビア、ルーマニア、ブルガリア、ギリシア、アラブ、ペルー、ブラジル、アルゼンチン、インド、および黒人、ユダヤ人の文学を含む。前半部には胡愈之（化魯）が書いた論文「現世界弱小民族及其概況」〔「現世界弱小民族及びその概況」〕、後半部に茅盾（馮夷）の論文「英文的弱小民族文学史之類」〔「英文の弱小民族文学史の類」〕が置かれ、胡愈之・茅盾はこうした文学を主張の一致するものとして引いている。

「創作特集号」（第2巻第4号、1934・4）と「中国文学研究特集号」（第2巻第6号、1934・6）は、中国の現代と古代に真正面から向き合うものである。「創作特集号」の小説欄における郭源新（鄭振鐸）の「桂公塘」〔「桂公塘」〕、王文慧（巴金）の「羅伯斯比爾的秘密」〔「ロベスピエール秘密」〕、張天翼の「包氏父子」〔「包氏父子」〕、および散文欄における沈從文の「湘行散記」は、いずれも当時の傑作である。鄭振鐸は三十年代に二つの小説集、『取火者的逮捕』〔「火を盗んだ者の捕縛」〕と『桂公塘』を出版した²⁴。前者はプロメテウス（Prometheus）が火を盗んで人類に与え、大神ゼウスの責め苦にあう。しかしプロメテウスは闘志をたぎらせ意志を貫いたというギリシア神話の小説である。小説集と同じ題名の短篇が『文学』第1巻第3号²⁵に載ると、「読者はこぞって、その気迫の雄壮さはなかなか見られないものと賞賛する」（傅東華、「本刊下期創作専号内容一斑」）²⁶こととなった。「桂公塘」は南宋の民族的英雄文天祥〔1236 - 1283〕の『指南録』〔詩集〕に取材している。文天祥が遣いに出て元の陣営に拘留され、十人余りの従者と深夜に逃亡し、桂公塘にたどりつくまでを描く²⁷。文天祥は途中、真州城で南宋の將軍に疑われ追われて、九死に一生を得る。「英雄未だ死の前に休むを肯んぜず、風起こり雲飛びて自由ならず」、「天地寛しと雖も容るるところ靡く、長淮誰か是れ主人翁ならんか」²⁸と、文天祥は天に対する問いかけと嘆息を発した。この小説は古風素朴な力強い筆致で、悲壮な民族の正気の歌を書き上げている²⁹。

「中国文学研究特集号」は鄭振鐸が編集した特大号で、従来その内容の充実と豊富さが賞賛されてきた。鄭振鐸は巻頭の文学論壇欄四篇を一手に引き受けたほか、「三十年来中国文学新資料的發現史略」〔「三十年来中国文学新資料の発見史略」〕、「元明之際的文壇的概観」〔「元代と明代間の文壇概観」〕、「元代公案劇發生的原因及其特質」〔「元代公案劇發生的原因及びその特質」〕、「浄与丑」〔「敵役と道化役」〕そして「読曲雑録」〔「読曲雑録」〕を書いた。このほかに魏建功の「中国純文学的形態与中国語言文学」〔「中国純文学の様相と中国語言文学」〕、朱自清の「論『逼真』与『如画』」〔「『逼真』と『如画』を論ず」〕、俞平伯の「左伝遇



「農村夜色」張慧作、『文学』第5巻第2期

〔「左伝遇」〕、霍世休の「唐代伝奇文与印度故事」〔「唐代伝奇文と印度の故事」〕、呉晗の「歴史中的小説」〔「歴史の中の小説」〕と顧頡剛の「灤州影戯」〔「灤州影戯」〕等があり、なかなか強大な文学史研究の陣容を示している。1934年春夏にまたがるこの四つの特集号の連続発行により、『文学』月刊は文壇の大木となり、容易には揺るがない存在となった。



「老漁夫」李樺作、『文学』第6巻第3期

『文学』における創作もめざましい成果を上げ、多くの作品が文学史上しばしば取りあげられる佳作となっている。上述した作品のほか、雑文と散文の分野ではさらに魯迅の「憶韋素園君」〔「韋素園君を回想する」〕、第3巻第4号、1934・10〕、「病後雑談」〔「病後雑談」〕、第4巻第2号、1935・2〕、「文壇三戸」〔「文壇人三態」〕、第5巻第1号、1935・7〕、「『題未定』草」〔「『題未定』草」〕、第5巻第1号、1935・7〕 および豊子愷の「縁縁堂隨筆」〔「縁縁堂隨筆」〕、第1巻第2号、1933・8〕と呉組緇の「泰山風光」〔「泰山風光」〕、第5巻第4号、1935・10〕がある。詩歌方面では臧克家の「罪惡的黑手」〔「罪惡の魔手」〕、第2巻第1号、1935・10〕、郭沫若訳のゲーテの詩劇「赫曼与竇綠苔」〔「ヘルマンとドロテア」〕、第8巻第1、2号、1937・1、2〕、梁宗岱、馮至が訳したニーチェの詩(第8巻第1号、1937・1)がある。最も注目されるのは『文学』が掲載した小説である。張天翼の「包氏父子」(第2巻第4号、1934・4) 落花生の「春桃」〔「春桃」〕、第3巻第1号、1934・7) 端木蕻良の「鶯鶯湖の憂鬱」〔「鶯湖の憂鬱」〕、第7巻第2号、1936・8) 、「渾河の急流」〔「渾河の急流」〕、第8巻第2号、1937・2) と長篇「大地的海」〔「大地の海」〕、第9巻第1、2号、1937・7) は、当時の小説の秀作と称するに耐える。第5巻第1号以後設けられた 特約中篇 欄には、これ以後もさらに佳作がしばしば見られる。例えば張天翼の「清明時節」〔「清明の頃」〕、第5巻第1号、1935・7) 沈從文の「八駿図」〔「八駿図」〕、第5巻第2号、1935・8) 郁達夫の「出奔」〔「出奔」〕、第5巻第5号、1935・11) 魯彦の「郷下」〔「田舎」〕、第6巻第2号、1936・2) 老舎の「新時代的旧悲劇」〔「新時代の旧悲劇」〕、第5巻第4号、1935・10) と「我這一輩子」〔「私の一生」〕、第9巻第1号、1937・7) はいずれも三十年代中篇小説の新たなレベルを代表するものである。

この雑誌は理論と批評とを極めて重視しており、当初 書報述評 という短評があった。その後矛盾の提唱と尽力により、第3巻第1号「一周年紀念特大号」(1934・7)の「作家論」形式へと発展した。この号には矛盾(未明)の「廬隱論」、穆木天の「徐志摩論」、許傑の「周作人論」がある。その後さらに矛盾の「冰心論」(第3巻第2号、1934・8) 、「花生論」(第3巻第4号、1934・10) 蘇雪林の「沈從文論」(第3巻第

3号、1934・9)と胡風の「林語堂論」(第4巻第1号、1935・1)が相次いで発表された。外国作家研究に属するはずの孟十還の「果戈理論」(「ゴゴリ論」、第5巻第1号、1935・7)までこの欄に侵入してきた。これは新文学が十年余り発展してきた中で、すでに一団の作家群を生み出していたことを示す。彼らにははっきりとした風格と、独特の創作方法と広範な影響力とがそなわっていた。さらに作家論の誕生とは、異なる芸術思想体系に基づいて作家の是非と優劣を論評することを意味し、特殊な形態における異なる思想体系の対決を反映している。『文学』が機を逸せずこのような特設欄を置いたことは、時代の文学の脈動を捉える敏捷性をものがる。

なお、『文学』月刊一周年記念特輯の『我与文学』(『私と文学』、鄭振鐸・傅東華編、上海生活書店、1934・7)および二周年記念特刊『文学百題』(傅東華編、生活書店、1935・7)には、いずれも独特の意匠を凝らした編集計画が窺われる。

四十二、『文学季刊』の寛容と『水星』の雅趣(楊義著 星野幸代訳)

1934年1月、北平に每期350頁以上の大型文学雑誌『文学季刊』(1934・1 - 1935・12)が現れた。主編者は鄭振鐸、章靳以(巴金も編集に加わった)、編集者には冰心、朱自清、沈櫻、吳晗、李長之、林庚がいた。執筆者名簿に卞之琳ら108人の名が並んでいる。もともと前の年の10月、北平立達書店が章靳以をこの雑誌の編集に招聘したところ、彼が自分の人望と能力では任に堪えないからと、燕京大学教授であった鄭振鐸を共編者として招いた。鄭振鐸の書いた「創刊の辞」は冒頭で次のように認めている。「胡適之氏の『文学改良芻議』(『新青年』、第2巻第5号、1917・1)が文学革命運動を發起し、周作人氏の『人的文学』(『人の文学』、『新青年』、第5巻第6号、1918・12)が新文学建設の基礎を定めた。文章は飾り気がなく包容力に富む。

「ここ十五年来多くの作家たちは、作風が違い視点も異なり、信条にも差異があると思われる。しかし一つ共通する傾向がある、

それは新文学の建設のために忠実で誠実な態度で努力していることだ。

この共通の目標のもとに、我々は、

(一)十五年来まだ完全には成功していない伝統文学と非人間的文学への攻撃と壊滅という任務を続行するだろう。

(二)新文学の作風と技術における改良と発展とに



『文学季刊』第2期

尽力する。

(三) 我々の文学の前途がいかに進展し、いかなる方向へ向かって進展しようとしているかを解きあかそう。(創刊号)

上海から北平へやって来て教鞭を執りながら編集に当たった鄭振鐸と、巴金との人脈により³⁰、この雑誌は北平作家と上海左翼文壇との溝の橋渡しとなり、「京派」と「海派」の垣根を破った。この雑誌が掲載した小説には、北方作家老舍の「黒白李」〔「黒李と白李」、創刊号、1934・1³¹〕があり、冰心の「冬児姑娘」〔「お冬さん」、同前〕、凌叔華の「千代子」〔「千代子」、第1巻第2期、1934・4〕がある。一方、南方作家吳組細の「一千八百担」〔「千八百担」〔一担は約五十キログラム〕、創刊号、前出〕と「樊家鋪」〔「はん商店」、第1巻第2期、1934・4〕、また上海から北平へ来た巴金（歐陽鏡容）の「龍眼開花的時候」〔「リラの花咲く頃」、第1巻第2、3期、1934・4、7〕、鄭振鐸の「神的滅亡」〔「神の滅亡」、第1巻第2期、前出〕と「蒂渦」〔「渦」、第2巻第4期、1935・12〕、沈櫻の「旧雨」〔「旧雨」、創刊号、前出〕があった。詩歌の作者は北方に偏っており、1936年に共著『漢園集』を出版し、「漢園三詩人」と言われた卞之琳、李広田、何其芳、そして廃名と林庚がいる。散文随筆の作者は南北両方ともに重みがあり、上海の魯迅、豊子愷、麗尼があり、また北平で『画夢録』〔文化生活出版社、1936〕を書いた何其芳と『廢郵存底〔無用の手紙覚え書き〕』を発表した沈從文がいた。そのほかに于道元の翻訳「屠格涅夫新散文詩」〔「ツルゲーネフ新散文詩」〕十六篇（第1巻第3期、1934・7）も一見の価値がある。

『文学季刊』で文学史上最も特筆に値するのは、巴金の慧眼による推薦で第1巻第3期に発表された曹禺の有名な劇「雷雨」である。この作品をもって中国新劇〔原文は中国話劇〕が成熟に向かう新たな



東京大学文学部が1925年朝鮮の平壤大同江郡（漢代の楽浪故郡）で後漢五官掾王盱の墓を発掘した。これはその墓から出土した鬘甲の小箱に貼られた人物画である。中央にある四枚の葉状紋は、漢代の鏡の模様によく見られるものである。葉の先には長烏帽子と皮衣をつけた人物が四人おり、研究者によれば胡人が漢代の四裔楽を演じているところで、上段左には二人の老人が、右に二人の婦人が座り、胡人の踊りを見ている図だとのことである。下段中央にひざまずき、横を向いて手を挙げている男は、やはり踊っている姿勢なのであろう。左側の二人の女、右側の二人の男も踊りを見ている。女の鬘は顧愷之『女史箴図』（現在復刻本がある）の絵を想起させ、北魏木版漆画の髪型にも似ており、六朝の女性の髪型がすでに漢代に見られたことが分かる。この図は『文学季刊』創刊号の「三種漢画発現」〔「三種の漢画の発見」〕に添えられ、第二期でも表紙に採用されており、この画に対する特別な思い入れがうかがえる。『文学季刊』の挿絵には文物が多く、上海『文学』月刊には当時の木刻が多く、それぞれ重厚あるいは新鮮なその風格を反映している。

幕が切って落とされた。上海の雑誌と比べて、『文学季刊』は学術的な気風がやや濃かった。この雑誌に論文を発表した鄭振鐸、朱光潜、吳晗、李建吾、梁宗岱、李長之は、みな大学教授または大学の俊英である。たとえば朱光潜の翻訳したクロウチェの「芸術は何（芸術とは何か）」（第2巻第2期、1935・6）と、趙家璧の発表した「海明威研究〔ヘミングウェイ研究〕」（第2巻第3期、1935・9）はいずれも純文学研究の趣があった。もちろん極めて現実感の鋭い胡風の「張天翼論」（第2巻第3期、前出）も掲載されている。最も興味深い長篇論文は鄭振鐸の「論元人所写商人士子妓女間の三角恋愛劇」〔「元代の人が描いた商人・士大夫・妓女間の三角恋愛劇を論ず」、第1巻第4期、1934・12〕であろう。それは、「三角関係の恋愛」という主題を通して、元代の政治・経済・社会の実状をかいま見せ、文学作品が含みこむ歴史の真相は公の正史より確かであると指摘する。これについて魯迅は書簡〔1935年1月9日鄭振鐸宛て〕を送り、この文章が「まことに隠された事実を洞察したものである」と褒める。それは実に、学問を活性化する思考の筋道を人々に提供している。

『水星』月刊（1934・10 - 1935・6）は文学季刊社が主体となって、1934年10月に創刊された。編集部は同じく北平北海三座門大街十四号³²におかれ、編集者には卞之琳、巴金、沈從文、李建吾、靳以、鄭振鐸がいた。第1巻第2期（1934・11）「水星編集室」は次のように述べる。「我々は、ある晩あるところ（楊義注：北海公園五龍亭）で座談し、仰ぎ見れば星が見え、うつむけば池が見えたせいであろうか、誰かが『水星』と呼ぼうと提案し、皆素晴らしいと思った……このささやかな雑誌に『水星』の名を当てるのは、ちょうど八つの惑星のうちこの小惑星が神の使者Mercuryの名を受けているようなものであり、また人の名前を阿猫、阿狗とつけるようなものであって 記号に過ぎない。」（「水星編集室」）この雑誌には専ら創作作品が掲載され、中でも散文の分野が最も優れている。そのことは、まさに小粒ながらも光を放ち、さらに詩趣のあることを自負するこの雑誌の名を体現していた。「巻頭の言はなく、編集後記がなく、表紙に絵はなく、作品の前に挿絵がなく、本文中に広告がない。この雑誌は一目見ただけでは雑誌に見えないだろう。しかしこのような地道な方法で行うことができるのなら、このようにやっていきたいと思う。論文と翻訳が重要だとは分かっているが、ただししばらく理論と紹介の仕事はほかの雑誌に任せたい。さもないと同人雑誌ではなくなり、またそれなりの個性もなくなってしまふ。そのような刊行物をこの雑誌界の中で作るのは全く無駄なこととなる。」（同上）『水星』は編集形式によって特徴を出そうとせず



上下とも『文学季刊』第1巻4期目次の裝飾図案

に、自分なりの特徴を示した。それは淡白さと奥深さである。

この三十二枚切りの雑誌『水星』と、十六枚切りの大判で分厚い『文学季刊』とを比べれば、もちろん「正餐と軽食」(卞之琳、「星水微茫憶『水星』」)〔「星水朦朧として『水星』を回想する」、『読書』、1983年第十期³³⁾〕の感がある。卞之琳が後に回想したように、正餐と軽食の効用は違い、人にもそれぞれ嗜好がある。『水星』は事実上『文学季刊』の「副刊」であった、というのは摘み取ってくる菜園は同じで、ただかまどと人手がそろえばよかったからだ。(同上)しかし雑誌の守備範囲には限りがあり、また「水に近き楼台は先ず月を得る」〔関係の近いものが得をする〕の便宜もあったため、雑誌の原稿の源は、当時のいわゆる「京派」作家に偏っていた。主要な寄稿者には周作人、李健吾、麁名、蹇先艾^{けんせんがい}、沈從文、巴金、鄭振鐸など文壇の老将、および何其芳、李広田、蕭乾、蘆焚^{しろうけん}など新鋭もいた。

周作人(知堂)はこの雑誌に「骨董小記」(『水星』第1巻第2期、1934・11)、「論語小記」(第1巻第4期、1935・1)、「關於画廊」〔「画廊について」、第1巻第6期、1935・3〕を發表した。周作人は三十年代にはすでに、「人的文学」を書いた時代の鋭気を失い、草木虫魚、河童、村芝居と古本雑書の中で吟詠し、悠然としてその苦茶随筆を綴った。彼の心中には風刺と隱逸とが交錯しており、自らも「私は明末のどこかの社団の一員だったのかも知れない」と感じていた。1934年に作った「五十秩自寿詩」〔「五十歳の誕生日の詩」、『人間世』創刊号、1934・1〕では、「半ばは是れ儒家にして半ばは釈家、光頭にして更に袈裟を着けず」、「傍人若し其の中の意を問えば、且く寒齋に到りて苦茶を喫す」と嘆息するようになっていた。後に『苦茶随筆』(開明書店、1935)に収められた「論語小記」にて、周作人は平民意識を儒家の經典に浸透させ、自分は「孔子の友人だと言えよう」と述べる。

「『論語』における孔子は根っからの哲人に過ぎず、全知全能の教主ではないと思う。後世の儒教徒は孔子を開祖として奉ろうとしたが、しかし彼はキリストではなく、ソクラテスの流れを汲むものだ、と私には思われる。『論語』二十篇の説くところは、おおかた人としての処世の道理であり、……後人の手本として供してもよいが、しかし天地における真理の教義として定めることはできない。さらには何らかの政治哲学の精義として、国を治め天下を平らかにできるものではない、……『論語』はやはり一読に値し、常識をわきまえた青年の参考として供するに足りよう。聖書のように思いこむことは、まったく必要のないことで、太陽の下にもともと聖書はない。」(「論語小記」、1935・1)

『水星』の紀行文と随筆には非常に特色があり、沈從文の「虎雛再遇記 湘行散記」(第1巻第1期、1934・10)³⁴⁾、鄭振鐸(西諦)の「昭君墓 西行書簡」(同上) およ

び蹇先艾の「車窗外 魯游隨筆」(同上)などがある。小説では蕭乾が最も注目に値する。この雑誌には「俘虜」〔「俘虜」、第1巻第1期〕、「籬下」〔「垣根の下」、第1巻第2期、1934・11〕、「皈依」〔「皈依」、第1巻第6期、1935・3〕が発表されている。そして創作の初心者と自称して、「自慢したい一方で気恥ずかしく、広大な世界に対する憧れと同時に、戸惑いに溢れ³⁵ている、「給自己的信 『籬下集』代跋」(第1巻第4期、1935・1)を発表した。それは本来、「『籬下集』〔商務印書館、1936年〕跋」として書かれたものである。蕭乾の処女小説集、『籬下集』は天津『大公報 文芸』副刊に端を發し、北平『水星』月刊で完成したと言えよう。

注

- * 1 : 底本は『二十世紀中国文学図誌』上下冊(楊義、張中良、中井政喜共著、台北業強出版社、1995・1)である。また、前書の増訂版『中国新文学図誌』上下冊(北京人民文学出版社、1996・8, 1997・12, 同第3次印刷)も参照する。なお翻訳文の中で、〔 〕は訳者の補足を示す。
- * 2 : この章の翻訳にあたっては、『断鴻零雁記 蘇曼殊・人と作品』(飯塚朗訳、平凡社、1972・10)を参照させていただいた。
- * 3 : 『曼殊全集』(柳亜子・柳無忌編、北新書局、1928・2 - 1929・4)の原本は未見。1985年影印本(後出)の第5冊所載「校後雜記」でも、『曼殊大師全集』(文公直編、文海出版社、1971・10)の「序」でも、『断鴻零雁記』(飯塚朗訳、平凡社、前編)の『蘇曼殊資料集録(未定稿)』でも『曼殊全集』とする。いまこれに従う。底本是北京中国書店影印本、全五冊、1985・9、この底本は『蘇曼殊全集』としているので、底本を指す場合『蘇曼殊全集』とする。
- * 4 : 『蘇曼殊全集』第1冊(前掲)所収による。
- * 5 : 『蘇曼殊全集』第1冊(「詩集」、前掲)所収。
- * 6 : 大意は次のようである。「海辺に去った魯連は秦を帝と認めず、遙か彼方の霞たつ海に流浪の身を過ごした。国民への憤りのあまり英雄も涙したことだろう。涙のそそがれたその海人のうすぎぬを君に送ろう。」
- * 7 : 大意は次のようである。「海と天に龍が戦い天地を染めているとき、私は髪を振り乱し長歌して遠い彼方の地を思いやる。易水に風は蕭々と吹き荊軻は去った。その気持ちは天空の明月のように白く、地に降りた霜のようであったろう。」
- * 8 : 「『断鴻零雁記』解説」(飯塚朗、『断鴻零雁記』、前掲)に、制作年代不詳の詩として詩名があげられている。この詩は『蘇曼殊全集』第1冊(前掲)「詩集補遺」に収められ、また『曼殊大師全集』(文公直編、文海出版社、1971・10)にも収められている。
- * 9 : 『蘇曼殊全集』第1冊(「詩集」、前掲)所収。
- * 10 : 大意は次のようである。「静かな心を取りもどそうと鏡台の傍らにいと、泥に湿った柳絮のように悲しみが染み通る。琴にべに色の涙を降り注いでいるうちに、香の火は燃えてまるで大火の後の灰のように残る。」
- * 11 : 大意は次のようである。「あなたは薄く眉を描いて画師に向かい、同心の鬢の豊かなもとどり

に青い糸を結ぶ。皿の顔料に画師のこぼれる涙が混じる。描き終わった梨花の絵を、誰にあげたら良いのだろうか。」

- *12 : 「題百助眉史小影片寄天笑」(『蘇曼殊全集』第1冊、「雑文類」、前掲)と題をつける。大意は以下の通りである。「限りない春の愁いに限りない後悔、琴の音はその思いをのせてしばし指の間になるかのようだ。私の袈裟はすでに涙でしみ通り、どうしてこのたやすく美しく奏されているように聞こえる琴をもう一度聞くことに堪えようか。」「本事詩」では、「無量春愁無量恨、一時都向指間鳴。我亦艱難多病日、那堪更聽八雲箏。」(『蘇曼殊全集』第1冊、「詩集」、前掲)とある。
- *13 : 「題百助眉史小影片寄天笑」(『蘇曼殊全集』第1冊、「雑文類」、前掲)、この一句は、「これによって百助女士に一笑して喜んでもらおうとする」、という意。
- *14 : 大意は次のようである。「寂しさのために寝間をあちこち歩くことを、誰が知ろうか。謝家の庭の姿はもう昔のようではない。家の中には塵が積もり、庭の小道に蓬が生え、葉のまばらな柳が門に垂れる。昼間は初めは長く感じるが、やがて清々しい風が吹く、過ぎゆく歳月はこうしてまた空しく消える。多感な燕が飛ぶのを目にすると、飛んできたかと思えば飛び去り、本当に疲れて見るにも耐えないことだ。」
- *15 : 大意は次のようである。「昔美しい娘は母に従い、運針を学んで窓際で縫い取りに挑んだ。いつか外は日が傾き、熨斗の火が銅斗に残るころ、線紋のしわをのぼした。いま蚕が三たび眠ろうとし、鶯が飛び来り絶えることなく囀る、晩春の落花の時節になっている。もう一度春がめぐり来たのだからがっかりしているべきかどうか。試みに川のほとりの町から聞こえるあし笛の音を聞いて見よう。」
- *16 : 『蘇曼殊全集』第1冊、「序跋類」、前掲。
- *17 : 「題百助眉史小影片寄天笑」(『蘇曼殊全集』第1冊、「雑文類」、前掲)。
- *18 : 『蘇曼殊全集』第3冊(前掲)所収の小説末尾の編者記による。以下三つの小説の初出も同じ編者記による。
- *19 : 底本は、『蘇曼殊全集』第3冊(前掲)。
- *20 : 『鄭振鐸年譜』(陳福康、書目文獻出版社、1988)「1933年4月6日」の項によれば、魯迅は『文学』月刊に賛同したが、編集委員会名簿に名前を公表しなかったという。
- *21 : 原文は「第7巻3号」とする。『中国現代文学期刊目録匯編』(韓之友等編、天津人民出版社、1988・9)によれば、画刊欄が現れるのは第7巻第3号であるが、画刊木刻欄等が画刊欄に統合されるのは、第7巻4号からである。いま、『中国現代文学期刊目録匯編』に従う。
- *22 : 原文は、①「読者只消一看本雑誌負責編輯人」、②「或用批評、或用考証」であるが、『文学』(第1巻第1号)によれば、①「...読者只消一看本誌負責編輯人」、②「或用批評、或用考証(考証本来也是一種批評)」である。いま『文学』に従う。
- *23 : 原文は「復本」であるが、『文学』第2巻第3号によれば、「複本」である。いま『文学』に従う。内容から判断して、『ダブリン市民』(ジョイス、安藤一郎訳、新潮文庫、2001・4、第68刷)の一篇、「対応」(Counterparts)であると思われる。
- *24 : 『取火者の逮捕』(上海生活書店、1934・9)、『桂公塘』(上海商務印書館、1937・6)いずれも『中国現代文学総書目』(賈植芳等編、福建教育出版社、1993・12)による。
- *25 : 原文は、「第1巻第4号」とするが、『中国現代文学期刊目録匯編』(韓之友等編、天津人民出

- 版社、1988・9)によれば、第1巻第3号に掲載される。いま『中国現代文学期刊目録匯編』に従う。
- *26: 『文学』第2巻第3号の目次の前頁に登載、署名はない。原文は「読者僉称気魄雄偉，不可多得」と引くが、原本は「郭源新君前在本刊發表諸作均取材希臘神話，読者僉称気魄雄壯，不可多得。」であり、鄭振鐸が『文学』に発表した3編の小説に対する評語である。
- *27: 鄭振鐸「桂公塘」は、文天祥が真州城を追われて放浪した末、桂公塘（揚州郊外の丘）に至るまでを描いている。いまこの筋に基づき、原文の意を改めたところがある。
- *28: 前二句は文天祥の詩集『指南録』の「紀事」、後二句は同じく「旅懐」に基づく。前二句は鄭振鐸「桂公塘」の結句に、後二句は同じく冒頭に引用されている。
- *29: 文天祥は晩年近く獄中で「正気歌」を書き、歴史を通じて民族に流れる「正気」を歌い上げている。
- *30: 鄭振鐸は、1931年9月上海商務印書館を離れ、北平の燕京大学と清華大学で教鞭をとった。1935年8月再び上海にもどり、上海暨南大学で教鞭をとる。1934年頃巴金もちょうど北上していた。
- *31: 『中国現代文学期刊目録匯編』（韓之友等編、天津人民出版社、1988・9）を参照した。
- *32: 原文は、「北平後海三座門大街十四号」であるが、『水星』第1巻第1期（『水星』全1冊、上海書店影印、1985・7）奥付けによれば、「北平北海三座門大街十四号」となっている。いま『水星』に従う。
- *33: 底本は、『水星』（上海書店影印、1985・7）の引用による。また、原文「正餐与茶点作用不同，人也各有所偏好」の部分は、卞之琳「星水微茫憶『水星』」に基づく。
- *34: 原文は「湘江散記」とするが、『水星』第1巻1期によれば「湘行散記」である。いま『水星』に従う。
- *35: 「給自己的信 附記」（『創作四試』、上海文化生活出版社、1947、底本は『蕭乾文集』第7巻、浙江文芸出版社、1998・12）。